「簒奪皇帝」の栄光と失敗

――ビザンツ皇帝バシレイオス一世の政治運営をめぐって――

小林　功

はじめに

ビザンツ帝国には数多くの帝位簒奪者が存在するが、九世紀後半のバシレイオス一世（在位八六七－八八六年）のように、二度にわたる暗殺に自ら加わった人物は例を見ない。彼はまずカイサル（副帝）のバルダスを、さらには皇帝ミカエル三世（在位八四二－八六七年）をも暗殺して、単独皇帝になった。

簒奪は容易に達成できるわけではない。また簒奪に成功したとしても、政府内で何ら支持基盤を持っていない人物に安定した政治運営を行うことは不可能である。実際、簒奪皇帝の多くが陰謀や反乱などの抵抗に悩まされている。それはビザンツ帝国史の中で高い評価を受けている皇帝であっても例外ではない。[①]

バシレイオス一世もまた、現在でも高い評価を受けている皇帝[②]の一人である。だが先述したようにバシレイオス一世はきわめて特異な状況の結果皇帝となっており、彼の政権基盤が最初から盤石のものだったとは考えにくい。事実旧稿でも指摘したように、バルダスやミカエル三世の暗殺後も、政府要人たちの顔ぶれには大きな変動が看取できず、彼らはバシレイオス一世と緊張関係にあったと考えられる。[③]

しかしながら年代記などからは、ミカエル三世暗殺後のバシレイオス一世に対する反発は、中央艦隊長官のニケタス＝オオリュファスがバシレイオス一世に抗議を行おうとした、とする『偽シュメオン年代記』などの情報しか確認できない。[④]こうした資料を根拠として、バシレイオス一世はミカエル三世の暗殺直後から強力なリーダーシップを発揮し、二〇年弱に及ぶ安定した政治運営に成功した、と見なす見解が強い。例えば二〇世紀初頭にバシレ

イオス一世についての浩瀚な研究を著したA・ヴォグや第二次世界大戦後のR・ジェンキンスらは、ミカエル三世は度を過ぎた愚行によって人々から見放されており、ゆえにバシレイオス一世の帝位簒奪は歓迎されたと論じている。[5] 近年でもバシレイオス一世の後継者であるレオン六世（在位八八六-九一二年）のモノグラフを著したS・タファーが、バシレイオス一世はミカエル三世の一族や支持者たちにとって、ミカエル三世の代理的な存在になっていたと論じ、やはりバシレイオス一世が早い段階から政権基盤を確立させていたと考えている。[6]

だが、こうした見解に与することはできない。なぜならこれらは、コンスタンティノス七世ポルフュロゲネトス（在位九一三-九五九年）の意図に非常に強く影響されているからである。コンスタンティノス七世は『続テオファネス年代記』や『ゲネシオス年代記』などの年代記資料の成立に大きな影響を及ぼしたが、そこで彼は祖父であるバシレイオス一世の帝位簒奪を正当化するため、ミカエル三世を徹底して愚人として描写している。[7] ミカエル三世に対する一定の再評価も進んでおり、[8] ミカエル三世から人心が離れていた、というヴォグらの見解はもはや成立しない。

別の角度からこの点について検討を加えているのがH・―G・ベック、及び彼に依拠する渡辺金一氏である。彼らは、この時期皇帝や有力者たちは自らの周囲に「従者団」を作って相互に勢力争いをしていたと論じる。皇帝が失脚すると、その周囲にいた人々の大半は没落し、代わって新皇帝の「従者」たちが政府のあらたな実力者として幅を利かすようになる。政権交代に伴って政府指導層の全面的な入れ替えが起きるため、新皇帝は最初から安定した権力を保持することが可能だったという。[9]

だが彼らの見解にも左袒できない。先述したようにバシレイオス一世時代になっても、政府の要人たちの顔ぶれはミカエル三世時代からの大きな変動が看取できない。彼らの想定するような「従者団」は、実際には存在していなかった。

ゆえに、ミカエル三世を暗殺して単独皇帝になった時点で、バシレイオス一世が盤石の政権基盤を確立していたと論じる従来の議論を受け入れることはできない。ミカエル三世の暗殺によって、それ以前から存在していたバシレイオス一世に対する不満や反発はむしろ強まったと考える方が自然である。

こうした観点から無視できないのが、V・ヴリシドゥの見解である。彼女によると、バシレイオス一世時代には一貫して、バシレイオス一世に反対する勢力が隠然たる影響力を持っていた。反バシレイオス一世勢力は特に彼の親ローマ・親西欧政策に反発し、皇帝の行動をさまざまな手段で妨害した。そしてその中心にいた

のがバシレイオス一世によって一旦追放されながら、後に復権したコンスタンティノープル総主教のフォティオスだったという。⑩

以下の議論で明らかになるように、彼女の議論をそのまま受け入れることはできない。だが彼女の見解は、ビザンツ帝国をとりまく対外的状況をも念頭に置いた視野の広いものであり、また彼女も指摘しているように、ミカエル三世時代から連続して政府中枢にあって、バシレイオス一世と緊張関係にあった有力者たちが存在していたことは明らかである。

しかしバシレイオス一世は少なくとも簒奪直後には、脆弱な政治的基盤しか持っていなかった。それゆえバシレイオス一世が、簒奪後の不安定な状況をいかなる手段で克服し、安定した支配を行おうとしていたのか、再検討を行う必要がある。

分析にあたって留意する点が二つある。第一に、簒奪までの時期、及び簒奪直後の状況についての慎重な分析が必要である。一般的に簒奪者に対する抵抗は簒奪直後がもっとも大きく、バシレイオス一世の場合も何の反発も生み出さなかったとは考えにくい。実際に先述したニケタス＝オオリュファスの例もある。ゆえに、簒奪直後の不安定な時期をバシレイオス一世がどのように乗りきったのかが問われなければならない。

第二に、治世末期の政治的混乱に対する分析が欠かせない。バシレイオス一世の治世末期には、息子のレオン（六世）の失脚（八八三年）以降政治的混乱が続いた。そして後述するように、八八六年に起きた陰謀にミカエル三世やバルダスと密接な関係を築いていた家門のメンバーが多く参加していることからも示唆されるように、バシレイオス一世の帝位簒奪とこの時期の混乱とのあいだには、何らかの関係があることが想定できる。

九世紀後半以降、ビザンツ帝国は政治的にも文化的にも栄光の時期を迎える。繁栄の時代に向かおうとしていた九世紀後半のビザンツ帝国で、皇帝がどのようにして自らの地位や権力を確立していったのか、また皇帝が周囲の人々とどのような関係を築きながら政治運営を行っていたのか、その一端が本稿での考察を通じて明らかになる。それはこの時期のビザンツ帝国の政治が、どのように動かされていたのか理解することでもある。また皇帝と周囲の人々がどのような関係を構築していたのかは、政治機構体としての国家がどのようにして運営されていたのか、という問題を考える上で不可避の論点である。本稿での分析は当然、こうした視点をも念頭におきつつ進められる。

① 例えば八世紀前半のレオン三世（在位七一七-七四一年）など。レオン三世については拙稿「八世紀前半におけるビザンツ皇帝選出のダイナミクス――「混乱の時代」の皇帝たち――」『史林』八六―一、

二〇〇三年、七一―一〇〇頁（以下、拙稿（二〇〇三）と略）参照。

② 例えば W. Treadgold, *A History of the Byzantine State and Society*, Stanford, 1997（以下、Treadgold(1997) と略）, p. 461.

③ ミカエル三世については拙稿「ミカエル三世と「従者団」――九世紀中盤ビザンツ帝国の皇帝と支配構造――」『史林』七八―二、一九九五年、三八―七四頁（以下、拙稿（一九九五）と略）も参照。

④ Georgius Continuatus B, *Chronika Georgija Amartola*, Petrograd, 1922（以下、GCB と略）, p. 17.; Symeon Magister (Pseudo-Symeon), *Chronographia*, Bonn, 1838（以下、Ps. Sym.と略）, p. 687.

⑤ A. Vogt, *Basile Ier. Empereur de Byzance (867-886) et la Civilisation Byzantine a la fin du IXe siècle*, Paris, 1908, pp. 42-46.; R. Jenkins, *Byzantium: The Imperial Centuries AD 610-1071*, London, 1966, p. 184.; cf. J. B. Bury, *A History of the Eastern Roman Empire: From the Fall of Irene to the Accession of Basil I (A. D. 802-867)*, London, 1912, p. 179.

⑥ Sh. Tougher, *The Reign of Leo VI (886-912): Politics & People*, Leiden, 1997（以下、Tougher(1997)と略）, p. 67.

⑦ 拙稿「二つの「ローマ皇帝」像――バシレイオス一世とミカエル三世――」歴史学研究会編『幻影のローマ――〈伝統〉の継承とイメージの変容――』青木書店、二〇〇六年、一八一―二一七頁（以下、拙稿（二〇〇六）と略）、二〇一―二〇五頁。

⑧ 拙稿（一九九五）。

⑨ ベックらの見解については、旧稿で詳細に紹介している。拙稿（一九九五）、三九―四〇頁。

⑩ B.N.Βλυσίδου, *Ἐξωτερική πολιτική καὶ ἐσωτερικὴς ἀντιδράσεις τὴν ἐποχὴ τοῦ Βασιλείου Α'. Ἔρευνες γιά τὸν ἐντοπισμό τῶν ἀντιπολιτευτικῶν τάσεων στά χρόνια 867-886*, Ἀθήνα, 1991（以下、Vlysidouと略）.

一　簒奪直後～治世前半

本章ではバシレイオス一世の簒奪直後と前半に焦点をあて、バシレイオス一世がこの時期にどのような方策・行動をとったのか検討を行う。なお、帝位簒奪までのバシレイオス一世の詳細な経歴については、旧稿①を参照されたい。

バシレイオスは共治帝となるまでは、プロトストラトル（皇帝乗馬時の随身）やパラコイモメノス（皇帝の寝室管理長官）など、皇帝の近辺で私的な奉仕を行なう役職を歴任しており、行政実務に関与した経験がほとんどない。当然それは、帝国の政務に携わっていた要人たちとの関係の希薄さを示唆する。事実、バルダス暗殺後のバシレイオスに対する反発を示す資料がいくつか確認できる。例えば『続テオファネス年代記』によると、バシレイオス一世が共治帝となった直後、元老院議員による反乱計画があった。②またバルダス執政期にロゴテテース・トゥー・ドゥロムー（外務・通信長官）を務めていたシュンバティオスらによる反乱③も起きている。先述したように簒奪直後にも、中央艦隊長官のニケタス＝オオリュファスが反抗する構えを示している。つまりバシレイオス一世は簒奪には成功したものの、なお反発する人々を政府

内に多数抱えた状態で、皇帝として政治運営を進めていかねばならない状況にあった。かかる状況では、バシレイオス一世の地位や権力は確立したとは言いがたい。ではバシレイオス一世は、いかなる方策をとったのだろうか。

最初にバルダス暗殺直後の状況を確認する。この時行政官職ではロゴテテース・トゥー・ドゥロムーがシュンバティオスからグメルに交代した。④ただしグメルにはバルダスとの婚姻関係があるもの、バシレイオスとの親密な関係は確認できない。⑤

一方、軍事官職では注目すべき変化が確認できる。バシレイオスの兄弟であるマリアノスがドメスティコス・トーン・スコローン、そして同じく兄弟のシュンバティオス（先述のシュンバティオスとは同名別人）がドメスティコス・トーン・エクスクビトーンに就任している。⑥これらはコンスタンティノープルあるいはその近郊に駐屯する陸上兵力（タグマタ）の主要二部隊（スコライ、エクスクビトイ）の長官である。また、ミカエル三世の暗殺の際には、ヘタイレイアルケス（ヘタイレイア＝皇帝護衛部隊長官）のアルタバスドスも共犯者となっている。⑦さらにドゥルンガリオス・テース・ビグラス（宮廷護衛部隊長官）はコンスタンティノス＝マニアケスであった。彼が早くからバシレイオス一世の知己であったことは『続テオファネス年代記』や『ゲネシオス年代記』で報告されており、⑧バシレイオス一世との対立は看取できない。

以上要するに、バシレイオス一世はミカエル三世の暗殺時までに、コンスタンティノープル近郊の陸上兵力の多くを自らの影響下においていた。タグマタやヘタイレイアの長官が参加しているミカエル三世の暗殺は、バシレイオス一世と中央の軍によるクーデターと言っても過言ではない。

一方、地方の軍（テマタ）とバシレイオス一世が無関係だったわけではない。バルダスやミカエル三世の暗殺にはヨハネス＝カルドスのような地方出身者⑨が参加している。またバシレイオスにテマ・マケドニア長官のツァンツェス配下で勤務していた経歴があることや⑩、パトラスのダネリス未亡人との有名なエピソード⑪などをも併せて考えるならば、バシレイオスは早くから地方の有力者たちとの密接な関係の構築に務めていたことがわかる。

簒奪後もかかる関係は継続・強化された。例えばレオンの剃髪の儀礼の際に、小アジアの多くのテマの長官や「アルコンたち」が参加している。⑫これも地方の有力者たちとの（個人的な）関係の強化をめざすものだろう。⑬反対に地方の有力者たちも、バシレイオス一世と結びつくことで自らの地位の上昇・強化をめざした。ダネリス未亡人の息子のヨハネスがプロトスパタリオスの爵位を

得たのはその一例である。[14] また、バシレイオス一世時代末期～レオン六世時代前半に活躍したカッパドキア出身の軍人ニケフォロス＝フォーカスは、若年時にバシレイオス一世のプロトストラトルを務めているが、これはかつてのバシレイオス一世の経歴と同じである。[15] これらの手段を利用して、バシレイオス一世は地方の有力者たちと密接な関係を結んだ。そしてそれによって、バシレイオス一世はテマタに対する影響力を保持したのである。[16]

バシレイオス一世は行政スタッフに対しても当然、影響力の強化に努めた。そのための方策として第一にあげられるのは、信頼できる人物の登用である。コンスタンティノープルにやってきた当初、バシレイオスの世話を行なった修道士ニコラオス＝アンドロサリテスの兄弟たちの抜擢[17]などがその例である。宦官のバアネスの登用も、同様の観点から理解できる。バアネスはバシレイオス一世によってプライポシトス及びサケラリオス（財務長官）に任命され、[18] バシレイオス一世の治世初期から数多くの重要な局面で大きな役割を果たしている。[19]

第二の方策は、バシレイオス一世に忠実な人物を新たに育成・登用することである。バシレイオス一世によって登用された人物としては、ステュリアノス＝ザウツェスがあげられる。後述するように彼はバシレイオス一世の治世末期に、ヘタイレイアルケスを務めていた。同様の例は、レオン六世時代に大きな影響力を持ったレオン＝コイロスファクテスや、先述したニケフォロス＝フォーカスなどにもあてはまる。[20]

しかし、バシレイオス一世の周囲に行政経験の豊富な人物が多数いたとは考えにくいので、こうした方策は限定的にしか行えなかっただろう。現実に資料から確認できる例も少ない。バシレイオス一世の一族も、兄弟たちの軍事面での登用はあるが、行政官職への登用はほとんど確認できない。[21] バアネスの重用もテオドラとテオクティストスの関係を想起させ、バシレイオス一世が行政スタッフとの協調関係を構築するにいたってはいなかったことを強く示唆する。実際バシレイオス一世の時代には先述したグメルの一族が陰謀の嫌疑をかけられており、[22] 微妙な関係が続いていたことが示唆される。[23]

また、子飼いの人物が頭角を現してくるのは治世末期である。[24] つまりこうした人物たちの登用は、バシレイオス一世治世の少なくとも前半期には、意味を持つにはいたっていなかった。

以上要するに、バシレイオス一世の背後には、中央と地方の軍事力があった。バシレイオス一世は帝位簒奪に際して、主に中央の軍事力に依拠した一種の軍事クーデターを敢行した。それに加えて、地方の有力者たちとも関係を強化して、テマタの把握にも

努めた。つまりバシレイオス一世の治世は、軍事力に支えられた軍事政権の時代であった。バシレイオス一世の功績も、活発な建築活動を別にすると、軍事的な成功が中心である。加えて彼自身の権威の強化のためにも、軍事的成功は不可欠だった。

その反面、ミカエル三世やバルダスと密接な関係を持っていた政府高官たちとは、なお緊張関係が続いていた。バシレイオス一世は新たな人材の抜擢などをすすめたが、そうした方策が大きく実を結んだとは考えにくい。バシレイオス一世の政治的基盤には不安定な要素が強く残っていたのである。

① 拙稿（一九九五）、四八―五一頁。

② Theophanes Continuatus, *Chronographia*, Bonn, 1838（以下、ThCと略），p. 207.; cf. Ioseph Genesius, *Regum Libri Quattuor*, Berlin, 1978（以下、Gen.と略），pp. 79-80.

③ S. Wahlgren(ed.), *Symeonis Magistri et Logothetae Chronicon*, Berlin, 2006（以下、Sym.と略），pp. 254-255.

④ Sym. p. 253.

⑤ バルダスの妻のテオドシアはグメルの一族である。J. O. Rosenquvist(ed.), *The Life of Irene Abbess of Chrysobalanton: A Critical Edition with Introduction, Translation, Notes and Indices*, Uppsala, 1986（以下、VICと略），p. 8.; cf. F. Winkelmann(et al.), *Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit I*, 6vols, Berlin, 1998-2001（以下、PMBZと略），#7792(Theodosia).

⑥ 拙稿（一九九五）、五一頁。

⑦ Sym. p. 259.

⑧ ThC p. 230, Gen. p. 78.

⑨ ヨハネス＝カルドスについては拙稿（一九九五）、五二頁。

⑩ Sym. p. 237.

⑪ ThC pp. 226-228. このエピソードについては渡辺金一氏も紹介している。渡辺金一『コンスタンティノープル千年―革命劇場―』岩波新書、一九八五年、一九三―一九六頁。

⑫ Constantinus VII Porphyrogenitus, *De Cerimoniis*, Bonn, 1829, p. 622.

⑬ cf. A. Vogt, "La jeunesse de Léon VI le sage", *Revue Historique* 174 (1934), pp. 389-428（以下、Vogt(1934)と略），pp. 398-399.

⑭ ThC p. 317.

⑮ GCB p. 20. 彼はマングラビテス（侍従）も務めている。これはバルダスやミカエル三世暗殺の共犯者であるコンスタンティノス＝トクサラスの経歴と類似しているが、彼も小アジアの出身であると考えられる。コンスタンティノス＝トクサラスについては拙稿（一九九五）、五二頁参照。

⑯ ただし、ニケタス＝オオリュファスの例からも示唆されるように、バシレイオス一世が艦隊を完全に掌握していたのかについては問題が残る。

⑰ Sym. p. 264.

⑱ ミカエル三世暗殺直後のプライポシトスはヨハネスという人物であった（Sym. p. 259.）が、八六七年末までにはバアネスがプライポシトスに就任している。Sym. p. 261.

⑲ バアネスは八六九－七〇年のコンスタンティノープル公会議の際には事実上の議長として会議を主導した。J. D. Mansi(ed.), *Sacrum Conciliorum nova et Amplissima Collectio vol. 16*, Paris, 1902（以下、

*Mansi*と略). バアネスは軍事行動でバシレイオス一世がコンスタンティノープルを不在にしていた際に皇帝代理をも務めている。Constantinus VII Porphyrogenitus, *Three Treatises on Imperial Military Expeditions*, Wien, 1990, pp. 144-146(text(c)795-807).: cf. PMBZ #719(Baanes Angures).

⑳ バシレイオス一世時代にミュスティコス（皇帝の秘書官）やカニクレイオス（皇帝のインク壺管理長官）を務めた。G. Kolias, *Leon Choerosphactes Magistre, Proconsul et Patrice*, Athen, 1939, p. 19.

㉑ マリアノスが一時ドメスティコス・トーン・スコローンとロゴテテース・トーン・アゲローン（皇帝領管理長官）を兼任していたようである。F. Winkelmann, *Quellenstudien zur herrschenden Klasse von Byzanz im 8. und 9. Jahrhundert*, Berlin, 1987, S. 89-90.

㉒ VIC pp. 88-100.: cf. K. A. Μπουρδάρα, *Καθοσιώσεις και Τυραννίς κατά τους μεσαίους Βυζαντινούς Χρονούς· Μακεδονικής δυναστείας (867-1056)*, Αθήνα, 1981（以下、Bourdaraと略）, p. 43.: F. Winkelmann, op. cit., 1987, S. 72-73.

㉓ cf. Vlysidou, pp. 34-35.

㉔ cf. Vlysidou, p. 49.

二　八八三年の政変
――バシレイオス一世の政治的地位の動揺

八八三年、共治帝のレオンが失脚し、八八六年七月まで三年あまり宮殿内の一室に幽閉された。その発端は、レオンが陰謀を企てているという、フォティオスの側近であるエウカイタ府主教テオドロス＝サンタバレノスによる密告だった。①

レオン失脚の要因については、フォティオスも関与した上でのサンタバレノスの陰謀であるという見解が強い。例えばヴォグはサンタバレノスや共犯者たちがレオンとバシレイオス一世を抹殺して、フォティオスの一族を帝位につけようとしていたと主張する。② またK・ブルダラやヴリシドゥはレオンの失脚を、レオンとバシレイオス一世の抹殺をめざすフォティオスの陰謀の一環と考えており、タファーもこの見解に従っている。③

しかしこれらの見解は、フォティオスにとってのバシレイオス一世の存在の重要性を看過しており、首肯できない。

フォティオスは八五八年にミカエル三世とバルダスによって総主教に任命されたが、バシレイオス一世は簒奪直後に彼を罷免した。にもかかわらず、フォティオスは八七三年頃に復帰する。

フォティオスには追放期間中も彼を支援する聖職者たちが多数いた。しかし復帰当時の総主教はフォティオスと対立関係にあったイグナティオスだった。彼が八七七年に没し、そして八七九／八〇年の公会議でフォティオスの名誉回復がなされるまで、フォティオスの地位は教会内部においても確固たるものとなっていたわけではなかった。④

さらに教会外でも、フォティオスの地位は脆弱だった。フォテ

イオスの一族はバルダスやミカエル三世を結節点とする血縁関係のネットワークに包摂されていた。[5] 換言すればフォティオスは、ミカエル三世やバルダスを支えて政治運営を行っていた高官たちと非常に深い関係を持った人物だった。それゆえバシレイオス一世はフォティオスの復帰によって、緊張関係にあったミカエル三世時代の有力者たちとの仲介者の役割を期待しただろう。

だが現実には、フォティオスはかかる役割を果たしていない。確かに、『イグナティオス伝』や『エウテュミオス伝』などから、フォティオスの復帰に伴って彼の一族や親しい関係にあった人々が何らかの役職に任じられたことは示唆される。だが明確に言及されるのはレオン＝カタキュラスのみである。[6] しかもレオン＝カタキュラスが就任しているのは軍事官職のドゥルンガリオス・テース・ビグラスであり、[7] 彼の登用がバシレイオス一世の政治基盤の強化につながったとは考えにくい。ヴリシドゥは、ナサル以前の歴代の中央艦隊長官がフォティオスと深い結びつきを持っていたと考えているが、[8] そのような結びつきを示す資料は少なく首肯できない。

以上要するに、フォティオスの地位は少なくとも八七〇年代末までは教会内部でも完全に確立していたわけではなく、また世俗の政治機構においてもフォティオスの復帰を契機としてバシレイオス一世に重用されるようになった人物は非常に限定的だった。このような状況では先行研究が想定するような、フォティオスを中心とする強力な政治的集団の存在は考えにくい。

それゆえフォティオスにとっては、自らを再抜擢し庇護するバシレイオス一世との結びつきが必要不可欠だった。八七〇年代のフォティオスの行動を見ると、別稿で分析したようなバシレイオス一世の地位の正当化のための言説の創出、[9] あるいはバシレイオス一世の最愛の息子のコンスタンティノスが八七九年秋に没した[10]後に彼を列聖するなど、[11] バシレイオス一世の意を受けた、あるいは皇帝におもねるような行動が多い。これらから、自らの立場を守り、皇帝との結合を強化するというフォティオスの意志が看取できる。つまりフォティオスにとってバシレイオス一世は、自らの地位の唯一のよりどころだったのである。

ゆえにフォティオスがバシレイオス一世を抹殺しようとするとは考えられない。フォティオスにとっては、バシレイオス一世の抹殺は自殺行為に他ならない。つまりフォティオスとサンタバレノスが、レオンのみならずバシレイオス一世をも抹殺しようとしていたという議論は成立しない。

では、フォティオスらがレオンのみの抹殺を意図して陰謀を企画していたと考えられるだろうか。

レオンの失脚を伝える資料から看取できるのは、レオンの処罰に対してバシレイオス一世が非常に積極的である、という点である。確かにサンタバレノスはレオンの陰謀計画の密告や、その他の人々についての密告などをバシレイオス一世に行なっている。しかしフォティオスがレオンの失脚に直接関与していたことを示す資料はほとんどない。[12] むしろ彼はレオンに対する処罰の軽減をバシレイオス一世に働きかけている。[13] レオンの失脚に関してはバシレイオス一世が主導権を握っており、[14] その意を受けてサンタバレノスが密告（調査？）などの行動を行なっている。

特にヴリシドゥに顕著であるが、これまでの研究の傾向として、フォティオスの政治的意図を過度に強調する一方で、バシレイオス一世の意思や政治的行動を完全に看過している点が挙げられる。換言すれば先行研究ではバシレイオス一世は、フォティオスらの陰謀に気づかぬ愚かで無力な老人のように見なされている。しかし現実には、バシレイオス一世自身が主導してレオンを失脚させたのである。

レオンの失脚に関連してもう一点看過できないのは、レオンに連座して多くの人々が処罰を受けていることである。[15] 八八三年時点では、レオンは共治帝とはいえ統治行為には参与していない。にもかかわらず、バシレイオス一世はレオンの抹殺を意図し、多くの政府要人たちをも駆逐しようとしていた。例えばドメスティコス・トーン・スコローンのアンドレアス＝クラテロスが一時的に更迭されている。[16] 彼は非常に早くからバシレイオス一世との関係のあった軍人である。[17] またレオン六世時代にマギストロスとなるステファノス＝カロマリアスも、サンタバレノスによって告発されている。[18]

J・グロスディディエ・ド・マトンによると、バシレイオス一世が没した直後、八八六年末の段階で、レオン六世は既に政府高官たちをほぼ完全に掌握していた。[19] だがレオンの復権はバシレイオス一世の死の直前であり、八八三－八八六年の期間にレオンが何らかの政治的行動をとれた可能性はない。それゆえ失脚直前の八八三年の段階で既に、レオンの周囲には無視できぬ数の中央政府の有力者たちが集まりつつあったことになる。こうした人々は当然、バシレイオス一世の治世を通じてバシレイオス一世と緊張関係にあった人々であろう。つまりバシレイオス一世は治世末期になってもなお、政府有力者たちとの有効な協調関係を構築できずにいた。加えて治世末期には、元来バシレイオス一世の強力な支持基盤だったはずの中央の軍のなかにも、アンドレアス＝クラテロスのように彼に反発する人物が現われてきていた。

以上要するに、少なくとも八八三年の段階で、バシレイオス一

世の政治的立場は危機的な状況になりつつあった。それを察知したバシレイオス一世は、実際に陰謀の意図や計画があったか否かは別として、反対派の中心になりつつあったレオンを失脚させ、彼に連座させる形でその他の人々をも抹殺しようとした。主導権を握っていたのはフォティオスでもサンタバレノスでもなく、バシレイオス一世自身だったのである。

では、何ゆえ治世末期にこうした危機的な状況が現出したのだろうか。背景として第一に挙げられるのは、八八〇年前後から軍事的な敗北が連続するようになったことである。この時期にはシュラクサの陥落によるシチリア島の事実上の喪失（八七八年）[20]や南イタリアでの敗北（八八二年）[21]、一旦回復したキプロス島の状況の悪化（八八二年頃？）[22]、そして小アジア東部におけるムスリムへの敗北（八八三年）[23]などが連続した。先述したように軍事政権的な色彩の強いバシレイオス一世期には、相次ぐ軍事的敗北は政権の動揺を引き起こす要因となりえた。

第二に、一族や側近たちの相次ぐ死があげられる。この時期までには先述した長男のコンスタンティノスやマリアノス、シュンバティオス、あるいは婿でドメスティコス・トーン・スコローンだったクリストフォロスらが世を去った。[24]バアネスも八七九年以降は資料で言及されなくなる。そして八八二年頃には妃のエウドキア＝インゲリナも没した。[25]

彼らの死によって、バシレイオス一世は自らの意を受けて行動してくれる有能な側近を失った。またエウドキア＝インゲリナの死も無視できない。彼女は九世紀前半から資料で言及されるマルティナキオス家の出身[26]で、最初ミカエル三世の愛人だった。[27]ミカエル三世は八六五年頃にバシレイオスをエウドキア＝インゲリナと結婚させたが、[28]これはバシレイオスをマルティナキオス家に事実上婿入りさせることによって、バシレイオスに対する反発を和らげようとするミカエル三世の配慮だろう。そして実際に、彼女が没した直後からさまざまな混乱が連続したことからも示唆されるように、エウドキア＝インゲリナはバシレイオス一世と政府要人たちとの関係を仲介する役割を確かに果たしていた。

このように八八〇年代初頭には、それまでバシレイオス一世の政治的立場を支えていたいくつかの条件が失われつつあり、結果としてバシレイオス一世に不満を持つ人々の動きも活発になりつつあった。こうした状況下、バシレイオス一世は息子で後継者のレオンをも切り捨てて、一応の危機を脱した。しかし、これによって彼をとりまく状況が基本的に改善されたわけではなかった。困難な状況はなおも続くのである。

① Sym. pp. 267-268, ThC pp. 349-350.

② Vogt (1934).

③ Bourdara, pp. 164-189.: Tougher (1997), pp. 79-80.

④ cf. F. Dvornik, *The Photian Schism: History and Legend,* Cambridge, 1948.

⑤ PMBZ #6253(Photios).: 拙稿「九世紀前半ビザンツにおける皇帝権力――テオフィロス政権を支えた人々――」『史林』七九―五、一九九六年、一一五―一四八頁（以下、拙稿（一九九六）と略）、一四〇頁。

⑥ P. Karlin-Hayter(ed.), *Vita Euthymii Patriarchae CP,* Bruxelles, 1970（以下、VEと略）, p. 11.: Nicetas David Paphlagonus, *Vita Ignatii, PG* 105, c. 487-574（以下、VIと略）, c. 569D.

⑦ 彼はレオン六世時代にドメスティコス・トーン・スコローンとなっているので、主に軍事経歴を重ねていた人物であると考えられる。

⑧ Vlysidou, pp. 59-63. ニケタス＝オオリニアスとフォティオスの親しい関係は『イグナティオス伝』から示唆される（VI c. 516C.）が、彼はフォティオスが失脚していた時期にも長官職を務めており、フォティオスの復帰と直接関連しない。一方中央艦隊長官だったエリアス宛のフォティオスの書簡があるが、それは必ずしもこの二人の親密な関係を示すものではない。Photius, *Epistulae,* no. 16, 121, 197.: cf. PMBZ #1503 (Elias).

⑨ 拙稿（一〇〇六）。

⑩ Sym. p. 266, ThC p. 348.

⑪ 拙稿（一〇〇六）、一九〇頁。

⑫ フォティオスと敵対して国外に逃亡していたステュリアノス＝マパスのみが教皇宛書簡でフォティオスの関与を指摘している。Mansi, c. 433. ただしこの書簡はレオン六世時代のものであり、記述は事実とは考えにくい。

⑬ Sym. p. 268, ThC p. 350.

⑭ ThC p. 350, Sym. pp. 268-269.

⑮ 『偽シュメオン年代記』によると、レオンの全側近が処罰されている。Ps. Sym. p. 697.

⑯ Sym. p. 269.: cf. ThC pp. 286-287.

⑰ 〝カエル三世は最初、バシレイオスをクタイレイアに配属したが、アンドレアスはその時クタイレイアルケスだった。Sym. p. 235.

⑱ Sym. p. 272.

⑲ J. Grosdidier de Matons, "Trois Études sur Léon VI", *Travaux et Mémoire* 5(1973), pp.182-242, pp. 198-200.

⑳ Sym. p. 264.

㉑ Sym. pp. 266-267, ThC pp. 305-306.

㉒ ビザンツ帝国はバシレイオス一世時代に七年間キプロス島を支配していた。Constantinus VII Porphyrogenitus, *De Thematibus,* Vatican, 1952, p. 81. A・ヴァシリエフはキプロス島の制圧を八七四－八七七年頃、W・トレッドゴールドは八七五年としている。A. A. Vasiliev, *Byzance et les Arabes II: La Dynastie Macédonienne (867-959) 1: Les Relations Politiques de Byzance et des Arabes a l'Époque de la Dynastie Macédonienne,* Bruxelles, 1968, pp. 64-65.: Treadgold(1997), pp. 457-458.

㉓ Sym. p. 269, ThC pp. 286-287.: P. M. Fields(tr.), *The History of al-Ṭabari XXXVII: The Abbasid Recovery,* Albany, 1987, p. 79 (A. H. 268).

㉔ cf. P. Karlin-Hayter, "L'enjeu d'une Rumeur", *JÖB* 41(1991), pp. 85-111, p. 98.: Treadgold(1997), p. 945 (n. 28).

㉕ E. Kurtz(ed.), "Zwei griechische Texte über die hl. Theophano die Gemahlin Kaisers Leo VI", *Mémoires de l'Académie Imp. de St-*

Petersbourg VIIIe série III-2 (1898), pp. 1-24（以下、VTと略）(also: http://www.doaks.org/saints2/TEXTS/24.html), p. 11.

㉖ Ioannes Skylitzes, *Synopsis Historiarum*, Berlin, 1973, pp. 127-128.

㉗ Sym. p. 234, Ps. Sym. pp. 667-668.

㉘ Sym. p. 248.

三　八八六年の状況
――バシレイオス一世に対する陰謀とレオンの復帰

八八六年の春、ドメスティコス・トーン・ヒカナトーンのヨハネス＝クルクアスを中心とする陰謀計画が発覚した。この陰謀には、ヘタイレイアルケスのミカエル、カトゥダレス、ミュクサレス、バブツィコスなど六六人の「元老院議員とアルコンたち」が参加していた。[1] この陰謀は、多数の「元老院議員とアルコンたち」の参加に加え、ミュクサレスやバブツィコスなどの、テオフィロス（在位八二九－八四二年）・ミカエル三世父子と関係の深い一門が参加していることも無視できない。[2]

また、首謀者がドメスティコス・トーン・ヒカナトーンというタグマタの部隊長であることと、ヘタイレイアルケスが参加していることも看過できない。八八三年に一時更迭されたドメスティコス・トーン・スコローンのアンドレアス＝クラテロスに続き、コンスタンティノープルの軍司令官がバシレイオス一世に反旗を翻している。つまり中央の軍のうち、動向の不明なエクスクビトイを別にすると、スコライ、ヒカナトイ、ヘタイレイアの三部隊がバシレイオス一世から距離を置くようになっていることがわかる。[3]

またこの時期、テマタの主力はニケフォロス＝フォーカスの指揮のもと、南イタリアに遠征を行なっていた。[4] バシレイオス一世が急死してレオン六世が実権を掌握すると、レオン六世はニケフォロス＝フォーカスを急遽召喚する。[5] これは、ニケフォロス＝フォーカス及び彼の配下の軍事力の動向が、レオン六世にとって非常に重大な意味を持っていたことを示唆する。つまりニケフォロス＝フォーカスやテマタは八八六年の時点でもバシレイオス一世に忠実だったということである。それゆえクルクアスの陰謀は、テマタの不在に乗じて計画された可能性が高い。

クルクアスの陰謀の後、バシレイオス一世はレオンを復権させて共治帝に戻した。『続テオファネス年代記』によると、これは元老院議員たちがレオンの復帰を働きかけた結果であり、また『テオファノ伝』によると、ヘタイレイアルケスのステュリアノス＝ザウツェスがレオンの復帰を進言した結果である。[6] レオンの復帰がバシレイオス一世の本心ではなかったことは『シュメオン

年代記』や『テオファノ伝』から看取できる。[7]

クルクアスの陰謀に参加したミカエルに続いて、ヘタイレイアルケスが重要な局面に登場していることは注目に値する。もはやコンスタンティノープルの軍は、バシレイオス一世にとっては頼ることのできない存在となっていた。テマタ不在の状況下ではそれは致命的であった。またステュリアノス＝ザウツェスのようなバシレイオス一世子飼いの人物ですら、もはやバシレイオス一世を支えることができなくなっていたことも示唆される。『続テオファネス年代記』の記述をもあわせて考えると、バシレイオス一世は中央政府の高官たちに加えて首都の軍からも、異議を申し立てられ、レオンの復帰を余儀なくされたのである。つまりバシレイオス一世にとって、レオンの復帰はいわば強要されたものであり、事実上のクーデターだった。

レオン復帰の直後、バシレイオス一世は狩りの際のけがが原因で急死する。[8] 単独皇帝となったレオン六世はすぐにフォティオスとサンタバレノスを更迭する。[9] フォティオスの失脚は不可避であった。先述したように、フォティオスの地位はバシレイオス一世次第だった。バシレイオス一世の死によって唯一の庇護者を失ったフォティオスの命運もまた、尽きたのである。

① Sym. pp. 269-270.

② 拙稿（一九九五）、拙稿（一九九六）。

③ ドゥルンガリオス・テース・ビグラスは前章で紹介したレオン＝カタキュラスである。

④ GCB pp. 20-21. なおヴリシドゥはニケフォロス＝フォーカスの南イタリア上陸を八八六年と考えているが、時間的に無理があり首肯できない。Vlysidou, pp. 199-207.

⑤ GCB p. 24.

⑥ ThC pp. 350-351, VT pp. 11-14.

⑦ Sym. pp. 268-269, VT pp. 13-14.

⑧ Sym. p. 270, VE pp. 3-5. なおバシレイオス一世は暗殺された可能性がある。Vogt (1934), pp. 426-427.; C. Mango, "Eudocia Ingerina, The Normans, and the Macedonian Dynasty", *Zbornik Radova Vizantološkog Instituta* 14/15(1973), pp. 17-27, p. 26.

⑨ Sym. pp. 271-274.

おわりに

バルダスやミカエル三世の暗殺によって帝位を簒奪したバシレイオス一世は、政治運営を行っていくための確固たる権力基盤を持っていたわけではなかった。そのため彼は、基本的には軍事力に依存した「軍事政権」的色彩の強い統治を行わざるを得なかった。

もちろん彼はその状況に安住していたわけではなく、新たな人材の登用などを通じて、中央政府の要人たちとの協調関係の構築

を目指してはいた。しかしバシレイオス一世の努力は結実せず、治世末期になると反発する勢力の動きを無視できなくなりつつあった。バシレイオス一世はそれを暴力的に抑圧しようとした。八八三年のレオンの失脚は、こうした文脈で理解できる。

だが、それは一時的な解決法でしかなかった。そして八八六年になると、首都の軍事力の大半までがバシレイオス一世を見限ることとなる。治世初期以来の「軍事政権」が破綻し、バシレイオス一世はいわば「軍」と「元老院」から反旗を翻されたのである。その結果、バシレイオス一世はレオンの復帰による事態の収拾を余儀なくされた。

このような経過から看取できるのは、皇帝には軍と行政機構双方の要人たちと親密な関係を築き、協議を行いつつ政治運営を行なっていく必要性があった、ということである。概説的にはビザンツ帝国では（特に九－十世紀に）中央集権的な政治体制が形成されており、その頂点に立つ皇帝が専制的な権力を持っているとされる。[1] 確かに皇帝は、時として専制的な行動をとることもあった。八八三年のバシレイオス一世の行動はその一例だろう。

しかし、皇帝が現実に専制的な権力行使を行うことには制限があることも、バシレイオス一世の事例は如実に示している。皇帝と周囲の有力者たちとの協調関係が危機に瀕すると、陰謀、あるいはステュリアノス＝ザウツェスらが行なった進言といった形で、皇帝に対する異議申し立てがなされた。皇帝は確かに、ビザンツ帝国という政治機構体の中で最大・最高の権力を行使できる存在である。だがそれは、政治機構体の他の有力な構成者たちの意向を全く無視した、皇帝の独裁的な政治運営が可能である、ということを意味するわけではない。

かかる状況は、旧稿で分析したように既に八世紀初頭には確認できる。[2] だが九世紀後半には行政機構の整備も進み、その要職にある人々の影響力はさらに大きくなっていた。またバシレイオス一世・レオン六世時代以降は小アジア軍事家門の政治的影響力も増大していった。[3] それゆえ、本稿で分析した九世紀後半においては一層、皇帝をとりまく人々と皇帝との関係の分析は重要な意味を持つ。また、十世紀以降のビザンツ帝国の支配体制の検討の出発点ともなるだろう。[4][5]

バシレイオス一世の死後、レオン六世が最初に行なったことの一つは、ミカエル三世の亡骸を首都対岸のクリュソポリスから、歴代皇帝が葬られているコンスタンティノープルの聖使徒教会へ改葬することだった。その際、ドメスティコス・トーン・スコローンのアンドレアス＝クラテロスをはじめとして、多数の「元老院議員たち」がクリュソポリスまで赴いたという。[6]

① 例えば和田廣『史料が語るビザンツ世界』山川出版社、二〇〇六年、三三―四二頁。

② 拙稿（二〇〇三）。

③ テマタやタグマタの司令官職などの主要軍事官職に小アジア軍事家門のメンバーが就任するのが通例となっていく。

④ バシレイオス一世と軍との関係も、こうした傾向を促進する一因になったかもしれない。cf. Tougher(1997), pp. 203-218.

⑤ 十世紀にはいわゆる「マケドニア朝」の正嫡帝（コンスタンティノス七世ら）が政治を主導せず、ロマノス一世レカペノス（在位九二〇-九四四年）ら軍人出身の皇帝たちと皇帝権力を分有する状況が現出する。

⑥ Sym. pp. 270-271.

（立命館大学文学部准教授）

The Political Management of Byzantine Emperor Basil I (867-886)

by

KOBAYASHI Isao

Byzantine Emperor Basil I (r. 867-886), who had usurped the Imperial throne by murdering the former emperor Michael III (842-867) and the *Kaisar* (Caesar) Bardas (Michael III's uncle), did not have a firm base to operate effectively in the political sphere. Basil I was thus forced to depend on the army, which had supported him before his accession as co-emperor in 866. Of course, Basil was not satisfied with this situation and attempted to establish a close relationship with high-ranking officials (Senators) by choosing a new, loyal staff. Basil's efforts were not successful, and he could not overlook opposition to his rule toward the end of his reign. Basil suppressed their actions violently, and expelled his son and co-emperor Leon (VI) from the throne in 883, claiming that Leon was the leader of the opposition. Although many scholars have argued that Patriarch Photios plotted Leon's downfall, it was actually accomplished under the leadership of Basil I. It has generally been thought that Photios also plotted against Basil I. However this claim is also incorrect. It was unlikely that Photios would have plotted against Basil I, because his position and political influence depended on the support of Basil I.

Although Basil I's position was stabilized by these actions, the situation was ephemeral. Tensions between Basil I and high-ranking officials continued, and in the last years of his reign most units of the army stationed in Constantinople (*Tagmata*) also opposed the emperor; thus, Basil I lost his most credible political base. As a result, the Senate and army took a defiant attitude toward him, and he was forced to reinstate Leon as a co-emperor in 886.

We can perceive from this course of events that it was necessary for Byzantine emperors to build intimate relationships and consult both high-ranking officials and the army in order to manage politics effectively. It has been assumed that the Byzantine Empire (especially during 9th-10th century) had a centralized political system in which emperor, who stood atop the hierarchy, exercised despotic and unrestrained power. Indeed, Byzantine emperors occasionally took despotic action, as did Basil I in 883. However, the case of Basil I also shows that there were distinct limitations on the "despotic" power of Byzantine emperors. When

the relationship between emperor and influential figures grew precarious, challenges to the emperor were manifest in the form of advice or plots. Basil I also encountered a plot in the spring of 886, and was pressed to reinstate Leon due to the exhortation of Senators and especially Stylianos Zautzes, Basil's reliable subordinate and *Hetaireiarches* (Commander of Imperial Bodyguards).

Although Byzantine emperors could exercise the supreme power within the Byzantine political mechanism, emperors could not disregard the intentions of other powerful members of this mechanism in managing the affairs of state.

A Bibliographical Study of Bird's-eye-view Pictures of Naha prior to the Nineteenth Century: Chronology, Composition and Genealogy

by

HORIKAWA Akiko

Twelve bird's-eye-view pictures of Naha 那覇, the international port of medieval and modern Ryukyu 琉球, are examined bibliographically in order to promote further study of the historical geography of the trade networks in the East China Sea. Reexamination of the autographs, seals, and changes in landscape representation shows that the pictures were created between the eighteenth and early twentieth century and executed under the influence of earlier works. The study also shows their origin dates back to In Gen-Ryo 殷元良 (1718-1767), a painter associated with the Ryukyu court. The dominant compositional element that was typical in the work of In Gen-Ryo's and other Ryukyuan painters was a view of the ocean from the land, emphasizing the prosperous international port, whereas several works by Japanese painters focused on Shuri 首里 castle as seen from out at sea.